第113号 たけの子だより 2019年5月7日

わかった！できた！

人はなぜ、学ぶのでしょうか。学校に行けば当然のように授業があり、子どもたちは様々なことを学習します。誰しも覚えがあると思うのですが、楽しい気分で学習したことは良い記憶として残っていますが、嫌々勉強したことは、その時は覚えていても、記憶から消えていってしまうことは、よくあることです。

わたしたちには、新しいことややりがいを求め、自分の能力を伸ばし、発揮したいという欲求が人間の本質として備わっています。**“内発的動機”**と呼ばれる自分の内部に本質的に存在する動機によって学ぶ時、人は生産的になり、幸福を感じるのです。その根底には「知的好奇心」と「自律性」があるとされ、外部からの報酬や罰などにより動議づける**“外発的動機”**とはあきらかな差があります。

人は学習する時に、「達成」（できた！）か「修得」（わかった！）かのいずれかの目標志向を持つとされます。達成（できた）志向は、競争的な環境のもと、他者との比較において能力を示す、もしくは能力のなさを隠したがるといった外発的動機づけによる目標です。

修得（わかった）志向は、興味・関心と関連しており、内発的動機づけによるもので、努力すれば成功に結び付くという自信とともに、学習、特に深い学習方略に有益とされています。

子どもたちの様子をみていると、単に「できた」という時よりも、試行錯誤の上、（やりかた・解決方法が）「わかった」という発見と驚きがあった時の方がより楽しく遊び（学び）を展開しています。好き・きらいといった情動、好奇心・興味、そしてもうひとつ“内的動機”に関係する主要な概念に「フロー」があります。『黒子のバスケ』という漫画には「ゾーン（最高の心理状態）に入る」という表現が使われていますが、そのことです。

フローの状態では意識が強く集中しているので、その行為と無関係のことを考え、あれこれ悩むことに注意を割かれることはありません。

これは、子どもが夢中になって遊んでいる時によく起きています。冷たいのも忘れ、冬の川に入ってみたり、ご飯を食べるのも忘れ集中してもの作りをしたり、服が汚れることも忘れて熱中して泥んこ遊びをしたり…。大人からみたら、バカバカしいことに、実に子どもたちはよくはまっています。

子ども時代のそうした、自分がしたいことを思いっきり遊びきる様々な体験の積み重ねが、その後の学習意欲を左右するのではないかと思います。学習という一見知的なことへの動議づけが、実は情動と強く結びついているのです。

一方人間の脳は、左脳（論理）よりも右脳（感覚・感情）の方が早く老化すると言われていますが、学習を継続して行っている方が、脳の機能が充実し、アルツハイマー病への抵抗力がつくとの仮説もあります。左脳と右脳、論理と感情は補い合っているのですね。

意欲的な学習には情動による動議付けが不可欠です。そして、学習、社会的活動、運動などで脳や身体を使い積極的に活動することで、認知機能を維持し、晩年になっても豊かに生きることができるのです。

今回の内容は、わたしが今放送大学で学んでいる『成人の発達と学習』（岩崎久美子）から多くを引用させてもらいました。

最後に、放送授業の中で、文芸評論家の小林秀雄の『美を求める心』を紹介していたので、抜粋して引用します。

「花の姿の美しさを感ずる時には、私たちは何時も花全体を一と目で感ずるのです。だから感ずる事など易しい事だと思い込んでしまうのです。

一輪の花の美しさをよくよく感ずるという事は難しい事だ。仮にそれは易しい事だとしても、人間の美しさ、立派さを感ずる事は、易しい事ではありますまい。又、知識がどんなにあっても、優しい感情を持っていない人は、立派な人間だとは言われまい。そして、優しい感情を持つとは、物事をよく感ずる心を持っている人ではありませんか。神経質で、物事にすぐ感じても、いらいらしている人がある。そんな人は優しい心を持っていない場合が多いものです。そんな人は、美しい物の姿を正しく感じる心を持った人ではない。ただ、びくびくしているだけなのです。ですから、**感ずるということも学ばなければならないものなのです。**そして、立派な芸術というものは、正しく、豊かに感ずる事を、人々に何時も教えているものなのです。」

辺見妙子

寄付や支援をいただいた方々　4月　順不同

支援金　渡部鋭幸　様
ひとてとひプロジェクト　様
手塚すみ子　様
土田英順　様